2020年度　東京経済大学大学院博士論文審査報告書

2021年　1月　25日

コミュニケーション学研究科委員長殿

論文審査委員

主査　　本橋　哲也

副査　　田村　和人

副査　　小林　　誠

審査の結果、下記のとおり報告します。

記

審査請求者	コミュニケーション学博士後期課程	
	学籍番号	18DC001
	フリガナ 氏　　名	ツカモト　ミホ 塚本　美穂

評価欄	審査委員署名（自署）	評　価
	本橋哲也	合格
	田村和人	
	小林誠	

＊評価欄には合格または不合格と記入してください。

論文題名
芸術作品と人形における身体表象

（NO．1）

（所見欄）

塚本美穂氏の博士論文「芸術作品と人形における身体表象」は、主に西洋史における身体表象の歴史と、それに伴う身体把握の変遷をたどることを理論的枠組みとして、そのうえで芸術作品における身体表象の特異性を行くつかのジャンルに分けて検討・分析し、最後に人形という形象に焦点を当てて、さらに身体表象の可能性と限界を追跡した論文である。

目次は以下のような構成を取っている。

序章……1

第一部　身体表象概論……19
第一章　身体とは何か
　第一節　身体の感覚……29
　第二節　顔……21
第三節　視覚と語り……24
第四節　社会とかかわる身体……26

第二章　身体表象の歴史
　第一節　身体の発見……32
　第二節　身体の変遷……33
　第三節　血と人種……38
　第四節　支配と女性の身体……39

第三章　身体の理論
　第一節　人間の身体……48
　第二節　解体される身体……48
　第三節　眼差される身体……51
　第四節　未来の身体……53

第二部　芸術作品における身体表象……58
第一章　小説
　第一節　食べられる身体――宮沢賢治『注文の多い料理店』……58
　第二節　改造される身体――メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』……62
　第三節　対話する身体――遠藤周作『沈黙』……69

第二章　映画
　第一節　失われた身体――ダルトン・トランボ『ジョニーは戦場へ行った』……88
　第二節　侵犯される身体――リドリー・スコット『エイリアン』……97
　第三節　超越する身体――ティム・ヒル『イースター・ラビットのキャンディ工場』
　……101

第三章　絵画
　第一節　照らされた身体――ヨハネス・フェルメール……110
　第二節　自己表象する身体――フリーダ・カーロ……121
　第三節　変化する身体――パブロ・ピカソ……128

第四章　漫画／アニメ
　第一節　再生する身体――手塚治虫『地球を呑む』……141
　第二節　スポーツする身体――浦野千賀子『アタック No.1』……159
　第三節　さすらう身体――士郎正宗『攻殻機動隊』……167

　補節　芸術における解釈　身体分析の見方の変化……177

第三部　人形における身体表象……177
第一章　人形の歴史
　第一節　人形の変遷……182
　第二節　世界・日本・米国の人形……186
　第三節　人間と人形……196

第二章　人形の身体性
　第一節　人形の身体……204
　第二節　資本主義による人形の商品化……208
　第三節　人形表象の多様化……213
　第四節　身体表象と現代社会……218
結語……235

参考文献……252

以下、各部分の議論を概観する。

「第一部 身体表象概論」では、身体についてどのような見解がなされてきたかが検討される。人間は身体を使って、物を見て、感じて、話して、思考するが、一方で、身体の表象においては、その身体がさまざまなイメージによって表現される。ゆえに身体表象の歴史をさぐることは、物質性を持つ身体がどのようにみられて変化してきたか、そして身体の歴史を知ることによって人間がいかに解剖学や医学といった人間の身体にかかわる学問を進展させてきたかを知ることになる。またその一方

で、人間の身体へ関心は自己の身体はもちろん、他者の身体に対する眼差しを生み出した結果、人間は他者の身体を管理するようになり、さらに身体をモノ化して商品として消費していくのである。

「第一章　身体とは何か」では、人間の動作にともなう身体表象および社会との関係が考察される。ここでは五感といった身体のもつ感覚と身体そのもののつながりが検討されている。「第一節　身体の感覚」では五感を通した身体の働きおよび五感に対する人間の見方が扱われる。五感が集中しているのは身体の上部にある顔であり、年齢や人種といった最も個体的な身体的特徴を表す。そのため顔はその人物についての情報を得る手がかりとなるが、そのことがギリシャやローマの彫刻、エジプトの壁画・彫像、中国の襖・掛け軸・書物・衣服などに描かれた人間の顔から調べられている。「第二節　顔」ではイエス・キリストの顔に焦点が当てられている。「第三節　視覚と語り」では視覚が果たす役割と他者の視線による管理について考察されている。「第四節　社会とかかわる身体」では社会とかかわる身体をめぐる諸論考が概説されている。

続く「第二章　身体表象の歴史」では、身体がどのように表象されてきたか、歴史的に構築されてきた人種や血といった概念、さらには女性の身体表象が検討される。「第一節　身体の発見」ではいかに身体が可視化されてきたかの歴史がとくに解剖学の発展をとおして辿られる。「第二節　身体の変遷」では15世紀以降の植民地征服による身体表象の変化が人種主義との関わりにおいて考察される。「第三節　血と人種」では、さらに一般社会における人種主義と身体表象との関係が扱われ、「第四節　支配と女性の身体」では、ジェンダーの視点から女性の身体表象の変遷が考察されている。

次に「第三章　身体の理論」では、人の眼差しによって変容してきた身体表象をめぐる理論的蓄積が概観される。「第一節　人間の身体」では、身体に対する多角的な視点の変化が検討され、「第二節　解体される身体」では、人間が自らの身体の内部を可視化するようになったことで、身体の分断、接合、変形がもたらされたことが検討されている。「第三節　眼差される身体」では、他者に対する眼差しから生み出される権力関係について考察されている。「第四節　未来の身体」では未来の科学と政治学における身体表象のありようが展望される。

「第二部　芸術に表象される身体」では、身体表象がさまざまな芸術作品から考察される。「小説」「映画」「絵画」「漫画/アニメ」の分野ごとに、具体的な作品が検討され、芸術によって表現される身体表象が、現実の身体の可能性を開いていくことが論じられている。「第一章　小説」では文字をメディアとする身体表象が、「第二章　映画」では映像というメディアによる身体表象が、「第三章　絵画」では文字が作られるより以前から行われてきた絵というメディアによる身体表象が、そして「第四章　漫画/アニメ」では、以上3つのメディアと異なるジャンルにおける身体表象の特異性が論じられている。

「第三部　人形における身体表象」では人形の歴史、人形と人間との密接関係へと論が進められる。「第一章　人形の歴史」では人形史に注目して、どのような人形が作られてきたか、人形がどのように多様化されたかが検討されている。「第二節　世界・日本・米国の人形」では世界の人形の概要を述べたのち、民俗学観点から日本と米国における人形文化が例として挙げられる。「第三節　人間と人形」では人間が自らの身体を表象する際にどうして人形が選ばれたかが焦点化されている。神、人、モノの関係は、従来であればモノが底辺、人が中間、神を頂上とするピラミッドの関係であったものが、近代ではモノが底辺、神が中間、人が頂点となる。そして現代の資本主義社会においては、人が底辺、神が中間、モノが頂点というようにその関係が逆転したことによって、人形という表象も変化してきたと論じられている。「第二章　人形の身体性」では、人間の身体の機械化とパーツ化の議論を進展させて、人間の身体の補完となってきた人形が取り上られる。「第一節　人形の身体」では、女性の身体の変化を著した人形や女性の生き方を示唆した人形が考察される。「第二節　資本主義による人形の商品化」では、モノの流通における生産者と消費者の関係を発展させて、消費者の商品に対する多方向的な見方が分析される。「第三節　人形表象の多様化」では、バービー人形を例として、バービー人形をモチーフとしている芸術作品が検討される。「第四節　身体表象と現代社会」ではマスコミュニケーション学の情報伝達の理論を援用して、商品とその商品に込められたメッセージの伝達者である製造者と、商品の購入者が受け取るメッセージに注目することで、現代の人形表象が考察されている。

以上のような概略からも推察されるように、本論文は身体表象の歴史と現状について、極めて広範な視点から概観を試みた意欲的な研究であり、研究の視野においては博士論文に要求される水準を満たしているものと考えられる。

そのように評価した上で、審査員からは、以下のような問題点と疑義の指摘がされた。

1）先行研究への目配りはかなり包括的になされており、相当な文献からの引用や参照はなされてはいるものの、その批判的検討という点で、十分な深度が獲得されているか？

2）特に第二部の芸術における身体表象に関する議論において、なぜ当該作品が取り上げられ、他の作品が検討されていないかについて、納得の行く正当化が十分になされているか？

3）とくに第一部の身体表象に関する理論編において、日本語としてやや不明確な議論が散見されるが、それは日本語表現の問題だけでなく、理論的枠組みに明確さが欠けるからではないのか？

4）身体表象をめぐる様々な話題を広範に取り上げた努力が評価できるが、それが全体として一貫した論考として十分な説得力を持っているか？　論文としての一貫性よりも、むしろ個別のエッセーとしての興味の方が先立っていないだろうか？

5）第三部の人形における身体表象の議論は、商品としての人形の詳細な紹介と、特定の人形が商品化されている社会的政治的文脈の分析において、斬新で説得力のある議論が展開されてはいるが、その議論が第一部における理論的枠組みの提示と、第二部における芸術作品の分析と、同幾関係にあるのかが明確にされていないのではないか？　その意味では、第二部と第三部は、異なる論考を二つ別個に並べたという印象を与えないだろうか？

1月20日にオンラインで行われた口述審査においては、とくに以上のような視点から、審査員から批評と疑問が提出された。
それに対して、塚本氏からは自らの論考の不十分な点に対する反省だけでなく、それなりに整合性のある応答がなされたことは評価に値する、というのが審査員一同の意見であった。

よって結論としては、博士論文として学界に誇るべき目覚ましい貢献をなしたとは言えないまでも、このような野心的な主題を選択して、多大な時間と労力を研究に注いできた功績は、博士としての資格に見合うものであるという合意が、審査員のなかで得られた。

よって、塚本美穂氏の博士論文を「合格」として認めることを、最終審査報告として提出させていただきたく、ご高配のほどよろしくお願い申し上げます。